

高橋文博 著

近代日本の倫理思想
主従道德と国家

思文閣出版

序

本書は、西村茂樹・福澤諭吉・阿部次郎・安倍能成・和辻哲郎、そして、修身教科書についての論考を集成している。これらのうち、西村茂樹と和辻哲郎に坎んする論文や文章の比重が大きくなっている。このことは、二人の思想家が、他に比べて、それだけ重要な意義をもつことをただちに意味するわけではない。後に述べるわたくしの問題意識からすれば、他のいずれも、重要な研究対象である。二人の思想家の論考の比重が大きくなった理由は、執筆の機会が多かったという、学問的重要性という点からすればいささか外的な事情による面が大きい。そもそも、本書に収めた論文や文章は、さまざまな機会に、それぞれ独立して執筆されたものである。それぞれの論考は、それぞれに特定の課題にもとづいた考察の成果であるから、それぞれ独立した学問的意味をもっている。その意味では、本書に収めた諸論考は、全体として密接な関連をもっているわけではない。

だが、これらの論考の執筆にあたり、わたくしには、明確な問題意識があつた。それは、近代日本の倫理思想の意義・特質を明らかにすることである。

近代日本の倫理思想といっても、決して一様ではない。そこには、階層的・地域的・時代的な変異がある。そうした変異にもかかわらず、近代日本の倫理思想として特徴的な性格を見出すために、わたくしは、近代日本における倫理思想の形成を主導した思想を取り上げて検討した。本書で取り上げた思想家や修身教科書は、近代日本における倫理思想の形成を主導した思想を展開している点で、考察対象として選択されているのである。

さて、近代日本における倫理思想の形成を主導した思想を、やはり、近代日本の倫理思想と呼んでよいであろう。だが、これらもまた、決して一様ではない。本書の考察対象とした思想は多様であり、時に相互に対立して

もいる。考察の主題も、それぞれに異なっている。それでいて、本書の諸論考を通して、近代日本の倫理思想を特徴づけるものが、透けて見えてくる。

本書の諸論考から透けて見える近代日本の倫理思想の特質とは何か。それは、まず、統一的全体としての日本国家を表象し、その日本国家および日本国家に等置されるものとしての天皇を、至高の価値あるものとする観念である。この卓越した日本国家の観念に、その国家に属する日本人としての人々の自己意識が結びついている。この一連の観念は、西洋近代の思想や学問への同化とそれへの対抗というコンプレックスをなしている。近代日本の倫理思想は、西洋近代の学知の全面的受容を通して、西洋近代の諸国家社会と異なる、独自の日本という観念としてある。そして、このことの裏面に、アジアの思想や文化からの異化と、それらの卓越的代表というコンプレックスを伴っているのである。

ところで、右のこととともに、近代日本の倫理思想において重要なことは、主従道德の持続的存在である。和辻哲郎は、近代日本国家における天皇への忠誠を、封建社会における主従道德としての忠君と捉えることの誤りを、くり返し主張した。だが、和辻がくり返し批判した主従道德は、近代日本の倫理思想のうちに、変容しつつも、根強く主張され続けた。近代日本において、国家と天皇への忠誠は、再編制された主従道德と並存していたのである。

近代日本の倫理思想は、前近代からもち越しの主従道德を国家への忠誠とともに求めていた。この事実、倫理思想における日本の近代と近代以後の意味を考える上で、重要な視点を与えるであろう。本書の書名を「近代日本の倫理思想」とし、「主従道德と国家」として内容を証示した理由である。

〈目次〉

序

第Ⅰ部 近代の立ち上げ——知識人たち

第一章 明治十年代の道德教育——修身教科書を中心に——

3

- 一 影の薄い道德教育……………3
- 二 君臣関係の双務性……………7
- 三 異議申し立て……………9
- 四 経過措置……………12
- 五 大いなる転換……………14
- 六 転換への対応……………16
- 七 転換の推進……………20
- 八 道德教育における明治十年代の意義……………25

第二章 德育論争における福澤諭吉

31

- 一 はじめに……………31
- 二 背景……………33
- 三 「全国一般の德育は宗教を頼むの外に方便ある可からず」……………35
- 四 「道德心の發育と其の標準は之を社會の氣風に一任す可し」……………39
- 五 「唯帝室あるのみ」……………43
- 六 「讀倫理教科書」……………46
- 七 おわりに——「普通心」……………48

第三章 道德教育における主従関係の近代……………53

- 一 はじめに——「主僕と云ふ者は骨肉の親に非ずして、一家の内に同居する者なり」……………53
- 二 「道德学ノ区分法」……………56
- 三 「主僕ハ約束以外二道アリ」……………64
- 四 「人々相依り相交ハリテ此生ヲ営ムト云フハ人類ガ固有ノ天性ニシテ」……………68
- 五 「若シ我ニ恩怨アル者ニ対シテハ如何セバ可ナラン」……………74
- 六 「東洋仁義ノ道ヲ守リ、西洋立憲ノ政ヲ行フ」……………80
- 七 おわりに……………85

第四章 近代日本における経済と倫理……………92

- 一 はじめに……………92
- 二 近代日本の経済……………92
- 三 近代日本の倫理（一）——「主人と召使」……………94
- 四 近代日本の倫理（二）——「自立自營と公益」……………98
- 五 おわりに……………102

第五章 阿部次郎の社会思想——『三太郎の日記』を中心に……………109

- 一 はじめに——「普遍と個はあるが種はない」……………109
- 二 「常に内面的衝動の充實を待ってゐた」……………110
- 三 「自己は自己であり他人は他人である」……………112
- 四 「汝自ら體驗せよ」……………117
- 五 「國家の干渉を拒むことが出来ない」……………121

六 おわりに……………127

第六章 安倍能成と平和論……………129

- 一 はじめに——問題への視点……………129
- 二 安倍能成と敗戦……………130
- 三 安倍能成と日本国憲法……………137
- 四 安倍能成における平和の理想の擁護……………142
- 五 おわりに——安倍能成における平和と国家……………146

第Ⅱ部 近代の語り直し——和辻哲郎

第一章 アジアの中の日本……………157

- 一 ヨーロッパを通しての日本発見……………157
- 二 世界の中の日本……………161
- 三 実体としての日本……………165
- 四 アジアの中の日本……………168

第二章 自然のあり方は「人間の有り方」……………174

- 一 「モンズーン」「沙漠」「牧場」……………174
- 二 人間と自然とのかかわりについて……………175
- 三 『風土』の三つの類型とは異なる類型論……………176
- 四 一つの国土としての特性……………177
- 五 地域とは共同体の姿である……………178

第三章 天皇・武士・民衆——和辻哲郎における日本倫理思想史の構図—— 180

一 はじめに 180
二 日本倫理思想史の構図 181
三 民衆に基盤をおく天皇 182
四 武士と民衆 184
五 二つの武士道 189
六 豊臣秀吉の位置 190
七 おわりに 193

第四章 和辻哲郎における敗戦 195

一 はじめに 195
二 「封建思想と神道の教義」 198
三 「封建思想と神道の教義」に先立つもの 203
四 「國民の歴史的な總意は天皇によつて表現」 205
五 「國民の歴史的な總意は天皇によつて表現」に先立つもの 207
六 敗戦状況への応答(一)——「平和國家の建立」 212
七 敗戦状況への応答(二)——「世界史の明かなる認識」 217
八 おわりに 224

第五章 和辻哲郎の戦後思想 232

一 はじめに——「平和な国際関係」 232
二 「二つの世界」 233

三 「近世ヨーロッパ」 238
四 「ヘンリ王子の精神」 240
五 豊臣秀吉と徳川家康 244
六 「武士道」 248
七 「町人道德」 251
八 「明治維新」 255
九 「忠君」 258
十 「真に平和な國家を、世界史上初めて作り出そうとしている」 260
十一 おわりに——「認識活動に於ける歴史性社会性は無視するを許されない契機だ」 264

第Ⅲ部 西村茂樹文献解題

一 「泊翁卮言」 271
二 「往事録」 273
三 「校正萬國史略」 275
四 「輿地誌略」 278
五 「求諸己齋講義」 280
六 「檀寧氏道德學」 283
七 「理學問答」 286
八 「希穀氏人心學」 289
九 「可吉士氏心象學摘譯」 292

結び 近代日本における倫理思想の特質

あとがき／初出一覧／索引(人名・書名)

第I部 近代の立ち上げ——知識人たち

第一章 明治十年代の道德教育——修身教科書を中心に——

一 影の薄い道德教育

明治五（一八七二）年八月に發布された「学制」は、近代日本の教育の出発点として重要な意義をもつものであった。「学制」は、小学校を下等小学四年・上等小学四年とし、第二十七章において下等小学の教科のなかに「脩身」をあげている。⁽¹⁾

「学制」發布の翌九月、文部省は「小学教則」を公布し、授業内容や週当たりの授業時間数と使用する教科書を示した。「修身」は、下等小学の第一年に週二時間、第二年前半に週二時間、後半に週一時間であり、上等小学に配当時数はない。この教科は「修身口授」に「ギョウギノサトシ」と「フリガナ」があるように行儀作法のしつけとして位置づけられている。⁽²⁾

この「小学教則」は机上の計画として作られたもので、実際に広く通用したのは、明治八年に師範学校の作った「小学教則」であった。ところが、師範学校の「小学教則」では、「学制」と文部省の「小学教則」では一応独立した教科であった「修身」がなくなり、「上等小学教則」の「読物」で道德的内容を扱うことになっている。⁽³⁾「学制」發布後の教育制度のもとで、道德教育は独立した意義をもつものとしてほとんど認識されていなかったのである。

このような状況でなされた「修身」の授業は、「口授」という方法をとった。そして、文部省の「小学教則」

で掲げられていた修身教科書は、次のような西洋書の翻訳であった。

- ① 青木輔清 『小學教諭 民家童蒙解』 明治七年刊 「近代」
- ② 福澤諭吉訳 『童蒙教草』 明治五年刊 「近代」
- ③ 箕作麟祥編訳 『泰西勸善訓蒙』 明治四年刊 「近代」
- ④ 阿部泰蔵訳 『修身論』 明治七年刊 「近代」
- ⑤ 神田孝平訳 『性法略』 明治四年刊 「近代」

これらの書物は、二種のまったく異なる性格をもっている。①は、和漢洋の修身書から善言を集めており、「人は萬物の靈たる事」「人は幼少の時勤學すべき事」などの項目について教訓している。②は、英人チャンプル著「モラルカラスブック」の翻訳であり、「動物を扱ふ心得の事」「親類に交る心得の事」など各章に人としての心得を立てて数個の例話によってその心得をさとしてしている。

③は、「緒言」によると、原本はフランスのボンヌが小学校で教えるために作り、一八六七年に刊行された。「第一篇 勸善學ノ大旨」第四章に「善トハ道理ニ合ヒ勸善ノ教ニ従フヲ云フ」とし、第六章に「善惡ヲ別ツ心ヲ良心ト云フ」とあるように、各人の「良心」と客観的な「道理」に照らして、人の務めを順序立てて説明している。人としての務めは、良心と道理の存在を前提として、理論的に説明されるのである。④は、「凡例」によると、アメリカのウェーランドの「エレメンツ、オフ、モラルサイアンス」の訳である。人の内にある「本心」つまり善惡是非の判断能力と、それと対応する「定則」という客観的法則との存在を前提して、さまざまな人としての職務を理論的に説明している。

⑤は、法律論であるから、いまは除外して、ただ「小学教則」では「講授」としてとされていたことを指摘しておく。

こうみると、①②の教科書は、望ましいとされている行為や態度を、具体的事実や例話あるいは教訓や嘉言によって、児童に教化するものである。「小学教則」では、これらを「説諭」する教科書としている。他方、③④は、正しい判断力とそれに対応する客観的法則を前提して、望ましい行為や態度を理論的に説明するものである。「小学教則」では、これらを「講述」する教科書としている。

「修身」は、「学制」発布から明治十三年の『小學修身訓』の登場までは、基本的に口授という形で教授されており、その場合の口授の方法は、右のような意味での「説諭」と「講述」であった。右にあげられた教科書はこうした方法に対応する書物であった。

「講述」の教科書は、西洋の倫理・道德にかんする学問的書物やその簡略本の翻訳であり、この種の教科書を講述型とよぶこととする。これに対して、「説諭」の教科書は、例話・事実を内容とするものと教訓・嘉言を内容とするもの、両者をあわせる中間的なものがある。中間的なものを一応度外視して、例話型と教訓型とに分類することとする。

こうして、修身教科書には、講述型・例話型・教訓型の三つの類型があることになる。

『小學修身訓』の登場する前年の明治十二年までの修身教科書の一部を例示してみる。

- | | | | |
|-----|-------------------|---------|-------|
| 講述型 | × 『泰西勸善訓蒙』 箕作麟祥編訳 | (明治四年) | 西洋書翻訳 |
| | × 『修身論』 阿部泰蔵訳 | (明治七年) | 西洋書翻訳 |
| | × 『啓蒙 修身談』 神鞭知常訳 | (明治十一年) | 西洋書翻訳 |
| 例話型 | × 『西國立志編』 中村正直訳 | (明治三年) | 西洋書翻訳 |
| | × 『童蒙教草』 福澤諭吉訳 | (明治五年) | 西洋書翻訳 |
| | × 『修身 人之基』 土屋弘 | (明治七年) | 典拠は和漢 |

あとがき

本書は、わたくしにとって三冊目の研究書である。本書に先立つ二冊は、徳川時代の儒家思想に関係するものであったが、これは近代日本の倫理思想を対象とするものである。

わたくしが、徳川時代の儒家を研究対象としたのは、近代日本の倫理思想を研究するための前提ないし前段階としてであった。そういう経緯であれば、本書は、前二冊の準備を踏まえた上での近代日本の倫理思想の研究成果であるから、元来の目的を十分達成できたかという点、必ずしも、そういうことにはなっていない。ものごとは、計画通りにゆかないものである。だが、前近代の倫理思想研究が、近代の倫理思想研究に生きているとはいえるであろうから、わたくし自身としては、それでいささかなりとも満足するほかはない。

なお、本書の内容を「主従道德と国家」として要約的に証示したが、本書をまとめるなかで、「批判的体制派の思想」として証示したい気持ちがあった。本書で取り上げた思想家は、いずれも、近代日本の倫理思想を主導し、近代日本の国家を至上のものとして理念的に価値づける傾向をもっていた。だが、また、いずれも、現実の日本国家と背離し、それによって疎外される場所があった。そういう理由からである。だが、本書の諸論考は、近代日本の倫理思想を主導した思想の分析ではあったが、それが、現実の日本国家から遊離する面を、意識的に掘り下げることをしていない。近代日本の倫理思想を主導した思想家たちが、日本国家を至上のものとして理念的に価値づけつつも、現実の日本国家から疎外される傾向をもつという逆説は、本書以後のわたくしの問題意識の一つとなった。

例えば、わたくしが、倫理学という学問分野の存在を知り、倫理学に志すようになったのは、和辻哲郎の書物に接した高校生時代のことである。そして、和辻の指導を直接受けた教授方のいる東京大学文学部倫理学研究室へ、希望通り進学して、その指導を受けて後、運よく岡山大学へ倫理学担当の教師として赴任し、以来、すでに三十五年が経過している。

この長い大学勤務のなかで、わたくしは、次第に大学教師として自己規定するようになった。大学に勤務する教員が大学教師として自己規定するのは当然すぎるほど当然のようであるが、必ずしもそうではない。というのも、大学に勤務する教員は、なによりもまず研究者として自己規定し、教育者であることと第二義的であると心得る傾向がないではないからである。まして、管理運営や社会貢献などは、「雑務」として軽んじる傾向もある。

わたくしが、大学教師として自己規定するようになったのは、そうした傾向に対する自覚的な選択としての意味をもっていた。研究はもちろん大事であり、大学はその機会をよく与えてくれる場である。だが、教育はもっとも重大な大学教師の使命であり、管理運営や社会貢献は、これまた大学教師の不可欠で重大な使命である。わたくしの大学教師としての自己規定は、研究至上主義、教育や「雑務」への軽視といった、一部の傾向への強い違和感にもとづいていた。

このような大学教師としての自己規定は、わたくしが、大学勤務のはじめから長らく、教養教育担当であったことによる面がある。だが、より大きな理由は、倫理学という学問に対する考え方によっている。わたくしは、倫理学という学問が、研究だけでなく、常に具体的現実とかかわるものでなくてはならないと考えている。このことは、倫理学が、それ自体として実践的応用的であるべきだということを意味しない。倫理学が、純然たる理論的研究であることもあるし、わたくし自身の研究がそうであるように、歴

史的研究の形をとることもある。だが、倫理学の研究は、研究者自身の具体的現実的とのかわりのなかでなされなくてはならない。そのように考えて、わたくしは、大学という場で要請されるさまざまな仕事を、可能な限り、遂行することを期したのである。

このようにいうのは、わたくしの研究成果が乏しく拙いことの理由とするためではない。わたくしの研究成果が乏しく拙いとしたら、それは、わたくしの非力非才の故である。わたくしは、比較的恵まれた研究環境にあつたし、研究にあたっては可能な全力を投入した。むしろ、その研究成果は、純然たる学問的手続きにもとづくものである。だが、本書としてあらわれた研究成果は、右にいうような、わたくしの倫理学についての考え方や自己規定と、直接的ではもちろんないが、つながっている。いささか冗句を弄した所以である。

非力非才の身にして、ともかくも、本書を刊行することができたのは、多くの方々の支えがあつたことによる。学恩やさまざまな意味で支援をうけた方々の名をあげて謝意を表したいところであるが、多数にのぼり、お名前を逸するとかえつて失礼である。すべての方の名をあげすることは、割愛させていただく。

ここでは、まず、古川哲史先生と尾田幸雄先生とに謝意を表したい。和辻哲郎に端を発したわたくしの倫理学研究は、近年、西村茂樹研究に集中するようになった。その機縁は、公益社団法人日本弘道会編『増補改訂 西村茂樹全集』の編集に参加したことである。そして、このことは、古川・尾田両先生のご推薦によることであつた。ところが、『増補改訂 西村茂樹全集』の刊行完成を目前にして、昨二〇一一年八月二十二日に古川哲史先生が、同九月三日に尾田幸雄先生が、相次いで逝去された。両先生に、追悼の誠とともに心からの謝意を表するものである。

また、『増補改訂 西村茂樹全集』は思文閣出版の刊行になるが、その編集に参加したご縁により、本書の刊行を思文閣出版に引き受けていただくことができた。市場価値に乏しい本書の刊行を敢えて引き受けて下さったことはまことに感謝に堪えない。思文閣出版に対して、そして、本書の刊行に向けて直接的にお世話下さった同社の中江俊治氏、および、精確緻密な編集をして下さった大地亜希子氏に、心からの御礼を申し上げる。

最後に、私事にわたるが、これまでの大学教師生活において、内助の功を尽くしてくれた妻由美子にも感謝の気持ちをあらわすこととする。

二〇一二年五月五日

高橋文博

第Ⅰ部 近代の立ち上げ——知識人たち

第一章 明治十年代の道徳教育

——修身教科書を中心に——

第二章 徳育論争における福澤諭吉

第三章 道徳教育における主従関係の近代

第四章 近代日本における経済と倫理

第五章 阿部次郎の社会思想

——『三太郎の日記』を中心に——

第六章 安倍能成と平和論

岡山大学倫理学会『邂逅』第一九号、二〇〇一年

第Ⅱ部 近代の語り直し——和辻哲郎

第一章 アジアの中の日本

佐藤康邦・清水正之・田中久文編『甦る和辻哲郎 人文科学の再生に向けて』ナカニシヤ出版、一九九九年

第二章 自然のあり方は「人間の有り方」

『人間会議』二〇〇四年夏号

第三章 天皇・武士・民衆

『理想』第六七七号、二〇〇六年

——和辻哲郎における日本倫理思想史の構図——

第四章 和辻哲郎における敗戦

岡山大学倫理学会『邂逅』第一七号、一九九九年

第五章 和辻哲郎の戦後思想

『日本哲学史研究』第八号、二〇一一年

第Ⅲ部 西村茂樹文献解題

一 『泊翁卮言』

日本弘道会編『増補改訂 西村茂樹全集』第三卷、思文閣

出版、二〇〇五年

二 『往事録』

同第四卷、二〇〇六年

三 『校正萬國史略』

同第五卷、二〇〇七年

四 『輿地誌略』

同第六卷、二〇〇八年

五 『求諸己齋講義』

同第八卷、二〇一二年

六 『檀寧氏道徳學』

同右

七 『理學問答』

同第九卷、二〇一〇年

八 『希穀氏人心學』

同右

九 『可吉士氏心象學摘譯』

同右

結び 近代日本における倫理思想の特質

新稿

◎著者略歴◎

高橋 文博 (たかはし・ふみひろ)

1948年、群馬県生。

東京大学文学部卒、東京大学大学院人文科学研究科博士課程(倫理学)単位取得中途退学。

博士(人文科学、お茶の水女子大学)。

岡山大学大学院社会文化科学研究科教授。

主要著書に『近世の心身論』(ぺりかん社、1990年)、『吉田松陰』(清水書院、1998年)、『近世の死生観』(ぺりかん社、2006年)など。

きんだい にほん りんり しそう しゅじゅうどうとく こっか
近代日本の倫理思想 主従道德と国家

2012(平成24)年9月25日発行

定価：本体5,500円(税別)

著 者 高 橋 文 博

発行者 田 中 大

発行所 株式会社 思文閣出版

〒605-0089 京都市東山区元町355

電話 075-751-1781(代表)

印 刷 亜細亜印刷株式会社
製 本

©F. Takahashi

ISBN978-4-7842-1656-7 C3012